

横須賀市

令和5年度 障害者グループホーム従事者基礎研修会②

# グループホームにおける 虐待防止の取り組み

淑徳大学副学長・教授  
社会福祉士

鈴木 敏彦

神奈川県障害者自立支援協議会会長  
神奈川県意思決定支援専門アドバイザー  
横浜市障害者差別解消支援地域協議会会長  
横浜市自立支援協議会委員  
川崎市自立支援協議会入所施設からの地域移行部会  
アドバイザー  
世田谷区自立支援協議会会長  
厚生労働省独立行政法人評価に関する有識者会議構成員  
特定非営利活動法人日本相談支援専門員協会監事  
社会福祉士・精神保健福祉士国家試験委員 ほか

# 1. 障害者虐待の現状（令和4年度）

厚生労働省  
2023年12月20日公表

	養護者による 障害者虐待	障害者福祉施設従事者 等による障害者虐待	(参考) 使用者による障害者虐待 (都道府県労働局の対応)
市区町村等への 相談・通報件数	8,650 件 (7,337 件)	4,104 件 (3,208 件)	1,230 事業所 (1,230 事業所)
市区町村等による 虐待判断件数	2,123 件 (1,994 件)	956 件 (699 件)	430 件 (392 件)
被虐待者数	2,130 人 (2,004 人)	1,352 人 (956 人)	656 人 (502 人)

※（ ）は前年の数値

## 2. 障害者虐待の類型

①身体的虐待	障害者の身体に外傷が生じ、若しくは生じるおそれのある暴行を加え、又は正当な理由なく障害者の身体を拘束すること
②放棄・放置	障害者を衰弱させるような著しい減食又は長時間の放置等による①③④の行為と同様の行為の放置等
③心理的虐待	障害者に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応その他の障害者に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと
④性的虐待	障害者にわいせつな行為をすること又は障害者をしてわいせつな行為をさせること
⑤経済的虐待	障害者から不当に財産上の利益を得ること

### 3. 身体拘束の適正化① 身体拘束とは

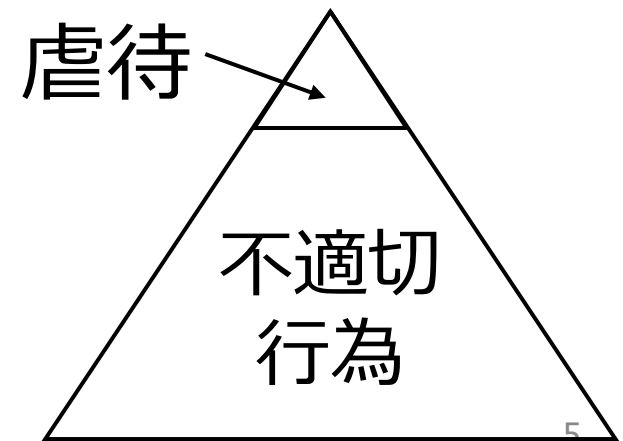
- ① 車椅子やベッド等に縛り付ける。※
- ② 手指の機能を制限するために、ミトン型の手袋を付ける。
- ③ 行動を制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる。
- ④ 支援者が自分の体で利用者を押さえつけて行動を制限する。
- ⑤ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。
- ⑥ 自分の意思で開けることのできない居室等に隔離する。

※ 肢体不自由、特に体幹機能障害がある利用者が、残存能力を活かせるよう、安定した着座姿勢を保持するためには、理学療法士等のリハビリテーション専門職や介護職員が連携し、安全性かつ機能性を高める様々な工夫が欠かせません。この姿勢保持に対する工夫の結果として、ベルト類を装着して身体を固定する行為は支援には必要なものであり、身体拘束にあたらないといえます。

## 4. 虐待と小さな不適切行為の積み重ね

- 大きな虐待は職員の小さな不適切行為から始まる  
「これくらいなら許される。」の積み重ねによる支援の質の低下、負の支援増加。
- 利用者が被害を訴えられない  
虐待を受けた人がその繰り返しの中で無力感を学習してしまい、ますます何も訴えなくなっていく。

虐待の“手前”にある  
不適切行為をなくす



## 5. 不適切行為の例（成人施設）①

行為等	具体例
呼称	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 職員間で利用者の話をする際、「あの人」「この人」等の表現で話す</li> <li>・ あだ名で呼ぶ</li> <li>・ 成人の利用者に対して「○○ちゃん」「○○君」で呼ぶ</li> </ul>
子ども扱い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実年齢よりも低い、子どもを相手にしたような話し方</li> </ul>
威圧	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大声：利用者に対し、遠くから大声で呼びかける</li> <li>・ 何度も言う：必要以上の回数は威圧</li> <li>・ 複数の職員による叱責</li> <li>・ 利用者の話をさえぎる：「わかった、わかった、もういいから」</li> <li>・ 職員が動かず利用者を動かせる</li> <li>・ 足や腕を組む</li> </ul>
急かす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者のペースを大切にしない：「早く！早くして！」</li> </ul>
交換条件 ※虐待にあたる場合もある	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 因果関係のない複数の事柄を交換条件とする：「作業が終わらないとお昼は食べられません」「座らないからテレビは見られません」</li> </ul>

## 5. 不適切行為の例（成人施設）②

行為等	具体例
プライバシーへの配慮の欠如	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 利用者の了承を得ずに、カバン、ロッカー等を開ける（形骸化した声掛け）</li><li>・ 利用者の前で、利用者の障害・支援について、職員同士で話す</li><li>・ 大声でのトイレ誘導：「〇〇さん、トイレ行くよ！」</li></ul>
嘲笑	<ul style="list-style-type: none"><li>・ からかったり、馬鹿にしたような話し方</li><li>・ 利用者の外見や繰り返し行為に対して笑う</li><li>・ 利用者の真似をする</li><li>・ よだれや鼻水が出ている場合に、「汚いなあ」と言いながら嫌そうな顔をする</li></ul>
服務規程違反	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 仕事に関係のない私語</li><li>・ 勤務中の私的な携帯電話の使用</li></ul>
支援計画	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 本人の意思を反映せず、支援者の思いとなっている計画</li><li>・ できていないことや悪いことに目がいき、本人を変えることに終始する計画</li><li>・ 合理的配慮や環境調整が十分ではない計画</li></ul>

## 6. 連続性の錯覚

はじめから虐待する人はあまりいないと思います。ちょっとした弾みで怒鳴ったり、たたいてしまったり。そんな経験のある職員は多いのではないのでしょうか。（中略）怒鳴ったり、たたいてしまったりした行為が、もしも「正当化」されたらどうなるのでしょうか。

「しょうがないか。職員も少ないし、泊まり勤務も多くて疲れているんだから。このくらいはどこでもやっている。これも指導の一環だ……」そのような思いは絶えず脳裏をよぎるはずです。しかし、怒鳴られたり、たたかれたりした障害者の顔を見ると、いつもの自分を取り戻すものです。ところが、そうした開き直りが確信に変わった瞬間、気まずさは消し飛びます。良心のタガがはずれ、抑制心が機能しなくなるのです。（中略）ささいなことが、ささいではなくなり、しだいに権利侵害の悪質さは増していき、虐待へと発展していき、それに対しても心が痛まなくなるのです。

ささいな行為からひどい虐待までが連続しているから、本人はいつまでもささいなことだと錯覚してしまう、それを「連続性の錯覚」と呼びます。



ご視聴ありがとうございました